

尚家旧蔵「組踊集」——翻刻と注釈——（下）

鈴木耕太

義臣物語

国吉のひや黒繻子入道頭巾金縷にて
飾有る黒紗綾袷衣裳繻子広袖羽
織脚胖足袋花加籠馬乘人沓つ

【001左】

おきれこふし沓つ鳴子沓つ若衆人形
沓つ編笠炬手花¹若按司半向
頭巾天鷲繻花金銀水引はさら
綸子袷衣裳脚胖足袋姉かもし
紫長巾作花金銀水引はさら
熨斗紙琉縫薄衣裳足袋新垣
のひ²崎本の子兩人黒西洋布入道頭巾
黒木綿巢³衣裳脚絆足袋崎本編笠
白作ひけ鎌杖童子四人半向頭巾
作花金銀水引はさら作花青銅振

【002右】

袖衣裳足袋鮫川の按司金入錦之
入道頭巾向に金欄籠之角飾有る水
色緞子衣裳羅陣羽織錦にて飾有る刀
太刀足袋脚胖大団ちやうきやく持
黒木綿単衣裳脚胖足袋夜廻
白木綿長巾黒木綿巢⁴衣裳脚絆
足袋拍子木

【002左】

一 出様ちやる者や、本の国子のひや今や
国吉の子、あゝ島尻の世の主高嶺の按司や、
色欲にほけて朝夕酒盛ひ、歌三味
線の絶ゆる間やなひらぬ、昔物語引
出ち、色々に異見みよんにゆけたん、
忠言耳に逆で、位剥とられやひ
をれば、おれからや日々に御万人や

【003

・004右】

背き、弓引かんでやりんしゆすや露程も

知らぬ、きのふ暁や、首里軍押寄て

責圍てをれば、出てたゝかたる者や

一人も又をらぬ、按司や切腹よめしや

うち、をなちやらと思子や与座の

子か引列て、逃忍て与座近く

いきゆる内、流矢に当てをなちやらと

与座の子や、道芝の露と消果て、

哀れ若按司と思なひかことや、知人や

をらぬ、あゝ高嶺のかんたからめ出す

者あらは、按司になち島知行も呉ん、

また一夜迎も隠し置くものあらは、

一門やだにも引はらふしまても、殺し

つくさしゆんでやり道々に高札のあれは、

あかりてた拜む人心やれば、御万人や

敵となて弓ひきゆる此時よやれば、

頓て生とられからめ出されらとめは、

あゝ至極気の毒とやゆる、片時も急ち

御行衛尋やい拜ま、此支度しゆてや

【003
・
004左】

【005
右】

若按司思婦出羽千瀬ふし

与所の疑もたちゆら、あゝ今とおめ
つきやる、細物人形売にやつれやい
いてたちゆん、

一 おめけひとわ身や親にすてられて

互になきくらちをるか心気

一 我身や高嶺の若按司とやゆる、首里

軍押よすて父母や殺されて、思なひと

わ身や只足にまかち、忍ひ出たすか

行先もしらぬ、与座嶽に登て高き

瀬の下に、夜や鳴明ちなまゝてやをすか、

たゆるものはなちけふ三日なゆん、

やあ思なひよ、新垣のひやゝやかあ

母方の祖父やれば、夜も暮てをれば

見る人やをらぬ、立寄ひ頼てかく

れやひをらに、

思なひ

一 たう、山路よやれば急ち出ら、

【005
左】

【006
右】

鳥も啼すみて夜や明てをれば
この山にかくれけふやくらさ

【008
右】

村瀬頭

一 是や多嘉良の村頭、上原んかい
耕作見廻にいきゆん、やあ、
かある山中に童へあてなしの、
いきやることやとてふたりゐちをか、

若按司

一 旅の者やすか長路の疲れ、足本も
やめは歩いてあゆまらぬ、しはし休ま

【008
左】

てやりこまにゐちをる、てよ、
先に通ら、

村頭

一 やあ、
へれば、慥高嶺の思子とやゆる、御氣
遣よめしやうな、我身や多嘉良の
村頭崎本とやへいる、あ、拝てなつ
かしや袖のなみた、

若按司

一 やあ崎本の子、二所の親に捨られて

ふたり、頼む方をらぬやとる方ないらぬ、

あの谷にかくれ此山にやとて、頓て

消果る露の身とやすか、けふまでや

死にやぬこまにをゆる、

崎本

一 やあ思子やあ思なひの前、此山に

わかやとりのあやへひん、山深さあれば

見る人やをらぬ、忍ひかくれとて時節

待めしやうれ、たう、
うちに御氣張よめしやうれ、

【009
左】

若按司

一 慈悲よ情けあて助やい給ふれ、

村頭

一 御急きよめしやうれ御供しやへら、

されわかやとりや是たやへる、内に

おんつかいしやへら、

【009
右】

国吉のひや

一 是や国吉の子、急ち細物人形売に

むちたちゆん、

道輪口説

一 一度榮へはひとたひおとろふ

世の中の習ひ思ひ知身の哀れはかなや

すそは結んでかたにうちかけやつれ

出たる姿言葉も今に引かへ島の島々

里のさと 〱 めくり 〱 て人形

かひんしやうれほとけかいんしやうれ

人形の数々おきれこふしに若衆

人形馬乗仏是むて童へなるこ

鼓みやほうろゝん 〱 ほうろ 〱

ほうつと

国吉のひや

一 やあ童へ、としよひやひ集めれよ

このほとけくひらに、

童子

一 やあ 〱 としのきや、仏呉ゆんでやり

【*010 右】

【*010 左】

いふる人のをもの、たう 〱 急ち出れ、

童子

一 仏け呉ゆんでやりあらは急ち出ら、

国吉

一 やあわらへ、仏や望次第くひゆん、

たう 〱 いらてとれよ、

童へ

一 わぬやこの馬乗ほとけとらに、

同

一 わぬやおきれこふしとらに、

同

一 わぬや鳴子とらに、

同

一 わ身や此若衆人形とゆん、

国吉

一 是むちやか 〱 、やあ童へのきや、

此村にしらぬわらへのかくれてや

をらね、正直にいふらは此人形とらさ、

童子

一 近方の村々にしらぬ童へやをやへらん、

【*011 右】

やあとしのきや、てよ——急ち宿に戻ら、
*011左

童子

一 やあ——、このころ上原の山やとりなかい、
しらぬ童へのふたり宿かやひをやへひん、

国吉

一 やあわらへ、おのやとりにつれて
いけ此ほとけとらさ、

わらへ

一 たう——列ていかに、こまとやゆる、

国吉

一 やあわらへ、約速^{マヤ}のこと此仏呉ん、
たう——急ち村にいけ、これ——、

*012右

同人

一 やあ思子——、御氣遣よめしやうなみすく
御目周けれ、我身^{マヤ}の^{マヤ}本の国吉のひや
とやへいる、やあ思子いきやるたより
あてこまにかくれやひいまひか、

若按司

一 世界や敵かたきやとる方なひらぬ、

此山のふもとに忍ひ隠れとす、多

嘉良の村頭崎本の子いきやて、あの
かけに此やとりにかくれやひをゆる、

*012左

国吉

一 やあ思子、此近方や心もとなさよ
あれは、遠く逃忍て時節待受て、
敵かたき討る計よしやへら、

若按司

一 やあ国吉のひや、親に捨られて
このなひよやれはいきちをても
いらぬ片時も急ち、父母よとまいて
いきほしやよあもの、列立ることや
ゆるちたはふれ、

*013
・
*014右

国吉

一 親かなし敵かたき討とらないたつらに、
肝ほれていまひめなまのことめしやう
る、たう——、つく——と此事や御思
案よめしやうれ、

若按司

一 やあ国吉のひや、あちやか日もしらぬ
敵にとれられて、哀れさま 〱 の憂め
むたよいか、いへも片時も急ちほしや
あもの、是非共に此事やゆるち給ふれ、

*013
・
*014
【左】

国吉

一 あゝ、此二月余るまでもねふる目もねらぬ、
細物人形売に姿引やつち、村々よ廻て
とまひつきやる心入、あたになち此身
なからへてを朮らよいか、逆も御前をとて
わとやはから、

若按司

一 やあ国吉のひや、試みとやたる今の
言葉や、ゆるち給ふれ、心実に今の
ことやれは誇らしやと 〱 あゆる、やあ
思なひよ、国吉のひやとやゆる出て御目
かけれ、

*015
【右】

思なひ

一 やあ国吉のひや、思けいとわ身や親に

捨てられて、頼む方をらぬかゝるかた

ないらぬ、哀れこのなひになやひまた
をもの、是非よ情けあて助けやひ
たはふれ、

国吉

一 あゝ拝てなつかしや袖のなみた、やあ

*015
【左】

思なひ

一 今のことやれは誇らしやとあゆる、これ
からや朝夕親と頼みゆもの、万事いか
ことやはからやひ給ふれ、

国吉

一 拝留やへて、やあ思子やあ思なひの
前、識名村花城のひやと義理立の
しほらしや、兄弟の契約結てあやへ
もの、あの宿に引越ひ隠れやひをや
へらに、

*016
【右】

若按司

一 やあ崎本の子、国吉のひやとやゆる出て
いまふれ、

崎本

一 国吉のひや久しう拌みやへて、

国吉

一 やあ崎本の子、思子二所の消果る命ち、
百情け故に助やひ給ふち、あゝ至極心
入感してとをゆる、やあ崎本、此近方や

心元なさよあれは、識名村花城のひや
宿におんつかいをかて、忍ひかくれとて
節待たんしゆもの、かたき討めしやいる
時節ともならば、共に肝揃て働やひ
たはふれ、

崎本

一 あゝ今のこことやれば誇らしやとあゆる、此
としになてをても御主人の御為、命ち
ふり捨て御腰立さんしゆもの、万事

いかことやはからやひたはふれ、

*016
左

*017
右

国吉

一 やあ思子やあ思なひの前、夜も暮て
をれば与所めなひぬあもの、たう、急ち
御打立めしやうれ、

長伊平屋ふし

一 いつし忘れゆか身にあまる情け
袖にぬきとめて別れくれしや

国吉

一 され花城のひや宿や是たやへる、
内におんつかいしやへら、

一 是や国吉の子、あゝ此二度の糸のい成迄も、

敵討んてやりねふる目も寝らぬ、心尽

しゆすぢか助へやをらぬ、先謀ことあもの

思子おんにゆけて、急ち火責しゆる謀よ

すらに、やあ、思子やあ思なひの前、

あゝ此二度の糸のいなるまでも、敵討ん

てやりねふる目もねらぬ、心尽しゆすか

助へやをらぬ、なからへてをらはいつも

かにさらめ、謀ことあもの先おんにゆけら、

*017
左

*018
右

けふや北風やたちゆひ、火責ともすらは
火のさわきにや、敵の首とゆす疑や
ないらぬ、急ちおの用意しやへら、

若按司

一 やあ国吉のひや、火責ともしゆんやれば
勝ちもしゆらやすか、一人の働や氣遣と
やゆる、

国吉

一 めしやいること、年月のいかは謀もあゆら、

徒らに月日重ならば、耳やないぬ壁の
ものきゝゆる世の中よやれば、若かよ所
しれてからめ出さらよいや、急ち火
責の謀や思立ちやへたん、

思婦

一 やあ国吉のひや、若か仕損て嵐声
のあらは、思けひとわぬやいきやかなゆら、

国吉

一 やあ思婦の前よ、此国吉かとしや
よていきゆひ、敵の首とらな此からに

*018
左

*019
右

死なは、おの時やまたいきやかめしやいら、

若按司

一 やあ国吉のひや、たうく わぬも列て
いかに、急ち火責しゆる用意され、

国吉

一 いやく、石垣よ越て忍ひ入事やれば、
思子御供からめきや働やならぬ、必ず
こまに御待めしやうれ、敵の首とやい
頓てこんしゆもの、

思婦

一 やあ国吉のひや、武士の義理やれば
別れてやいまひい、油断さぬことにもの
めつめて、

東江ふし

一 おめきやひをても是までよとめは
むちたちゆるきはや袖のなみた

夜廻

一 けふや北風もかうく 立ひ、夜廻り
念入りよてやり按司のみよんきことやれば、
おとろしやゝあても先急ちとふら、

*019
左

あけちやめやう、米蔵はい、
けふや

【020右】

北風やかう、立ひ、起て居ちをれ、

おふほゝん、はひたか、たかては、

あゝまやあさめ、代官はい、起て居ち

をれ、おふほゝん、はひのふもあらぬさめ、

一 是や国吉の子、夜も更てをもの急ち

火責に出立ん、

早口説

一 門に立寄伺へは用心きひしく夜廻

の拍子木しけく音すれは忍ふ思ひも

【020左】

いならぬ、南無や八幡大菩薩力を

合してたひ給へ北風はけしく吹

音にまきれて石垣飛越て人目も

今は絶間ある、軒端の下に寄かゝて

すわや火をかけ火煙たつ

供

一 火事よ、され、按司かなし、火遣

盗人からめとやへたん、

鮫川の按司

一 あゝ出来た、

【021右】

供

一 盗人や是たやへる、

按司

一 是やよしのあるものとやゆる、やあ供

のきや、たう、みすく尋やひ聞け、

供

一 拝留やへて、やあ盗人、いきやし

ちやるものか、

国吉

一 錢金の盗人やあらぬ、鮫川の按司の

首のほしやに、城焼崩さてやりしちやん、

按司

一 やあ供のきや、此世の中に国吉のひや外に、

【021左】

今のことおほ口にもいふすや一人も又

をらぬ、是や決して国吉のひやと

やゆる、たう、急ちこれに出す

火遣の所存直に尋ゆん、

供

一 拝留やへて、さあ、御前に出やうれ、

按司

一 やあ国吉のひや、火事のさはきにわぬ

討んでやりしゆすや、螢火の須弥山

焼くつさてやりしゆる心、流石武士の

身の習やおの筈とやゆる、主人の恩義

忘れらぬ忠義の心入、あゝ感^{ママ}して^{ママ}

をゆる、

国吉

一

あゝ頼むかたなひらぬ助部もをらぬ、

一人の働に城焼くつち、按司の首とやい

冥途のみやけさんともて今の企とや

よたる、あゝ武運のちようさ御果報と

やゆる、

按司

一

やあ国吉のひや、高嶺の按司と気任に

暮ち、酒と色好みおこりに増て、百姓の

苦み諸臣下の難儀、あけてかそららぬ

*022
【左】

*022
【右】

罪科のあてと、島国の為討果ち

あれは、わか身しちまねちある災と

やゆる、やあ、高嶺のなし子からめ

出すてやり、島々に堅く言渡ちあすか、

此二年の糸のひ成迄も音伝も聞ぬ、

今につく、と考てむては、罪科やおかち

ある本人にあて、妻子まで罪に

行ゆることや、道ならぬあもの忍らぬ

あこと、隠し置あらは助けやひとらさ、

国吉のひや

一

あゝ乱軍の内をとて殺されかしちやら、

若按司の行衛や夢ほともしらぬ、

按司

一

やあ国吉のひや、静に心入かたらひ

ほしやあもの、たう、先繩よ解ゆるすさ、

やあ、得と肝あしていやは聞留れ、

おかや島尻の一本柱、智勇兼揃て

をる武士の事やれば、殺しゆすに

忍はらぬ助ほしやあもの、わか所存取受て

*023
【左】

*023
【右】

奉公よすれ、

国吉

一 あゝなまの仰すことみはいとやゝへすか、
ふたゝひ奉公の望やあやへらぬ、たうゝ
急ちおの支配仰すめしやうれ、

【*024右】

按司

一 いやゝゝ、耳の根よあけてたに由聞留れ、

誠名^{ママ} 按司に忠節よやは、主人行末の

よしあしのことや、身の上に引受て

思らねはならぬ、いらぬ義理たてゝ

殺されよすらは、たとひ若按司の

生残てをても、たる頼て世界になから

へてをひなゆか、やあ国吉のひや、ものや

一方に泥てをて済ぬ、ことのおもさ

【*024左】

あすかゝぬことしゆすと、変に応しゆる

謀やあらね、たうゝゝ、つくゝゝとおめ

わかち真実に語れ、若按司もいやも

共に助ゆん、神仏かけて偽やあらぬ、

国吉

一 あゝみよんきこと拝て袖とぬら

しやへる、先わか願ことのとちゆん

ともやは、天に飛のほり地の底も

くゝて、若按司の行衛尋やひきやあへら、

【*025右】

按司

一 たうゝゝ、急ち願事よ語れきゝゆん、

国吉

一 先若按司に一間切の地頭按司の

位添て、高嶺の按司の跡目立て、四季

の祭礼取行ゆんやは、君家再

興のためやれば、武士の義理曲て

をかんちゆめやれは^{ママ} 12、

按司

一 あゝ此願事もむはや又ならぬ、たうゝゝ

望みにまかさ、

【*025左】

国吉

一 あゝたうと、段々の御慈悲なまのことやれば、

心うちはれて実よみよんにゆけら、

識名村なかひ隠やひいまひん、

按司

一 やあ国吉のひや、急ち識名村いきやひ
みすくいひ聞ち、兄弟落つかちさうて

国吉

きやうれ、一 拝留やへて、

按司

一 たうく いそけく、

国吉

一 御供からめきやいきやへたん、

【026右】

按司

一 たうく 急ち呼よく、やや^マ若按司

よ、国吉のひやか願事よ聞は、理りよやれは

肝くれしやあもの、按司になち島

知行も¹⁴ 呉ゆん、たうく けふからや

三人心安すく とをりよ、

若按司

一 あゝたうと、此御恩たうとさや

いつし忘れゆか、やあ国吉のひや

此御恩一期ちゝにかめら、

国吉

一 あゝ此御恩たうとさや石にや石
のいしの、大瀬成までもおかけ
ほさへめしやうれ、

按司

一 たうく、けふの誇らしやに、押列て
たかひに踊てもとれ、

若按司

一 おしつれて互に踊て戻やへら、

清屋ふし

一 けふの誇らしやゝなをにきやなたてる

つほてをる花の露きやたこと

【027右】

同ふし

一 こゝのえのうちに苔て露まちゆす

嬉しこときくの花とやゆる

【027左】
*029左まで白紙

【030右】

天願之若按司敵討

着付謝名之大主髪錦之入道頭巾

【026左】

向に金磨之龍角有る水色緞子衣裳
羅陣羽織錦にて飾有る太刀刀大団足
袋脚胖富盛大主髪黒縹子入道頭
中向に金欄にて飾有る黒袖衣裳青縹
子広袖羽織刀脚胖足袋川崎之ひや
平田の子髪黒西洋布入道頭巾黒木

綿単衣裳脚胖足袋ちやうちやく

持かむらふ黒木綿単衣¹⁵ 脚胖足袋供

髪黒西洋布入道頭巾黒木綿単

衣裳脚胖足袋差繩天願の若按司

髪半向頭巾金花并金銀水引はさら

緋綸子衣裳緋西洋布足袋中入より

錦入道頭巾錦にて飾有る羅陣羽織

錦にて飾有る脚胖足袋扇子持出る但

戦之時甲胸当長刀同人妹板へ縮緬

桐衣ひさ取裙緋西洋布足袋宿元

謝名之大主供同断久志之若按司髪

錦之入道頭巾向に金磨之龍角飾有る

青縹子衣裳羅陣羽織錦にて飾有る刀

【030左】

【031右】

脚胖足袋但中入より青縹子広袖羽織
雨笠¹⁶ 杖陣賦之時髪錦之入道頭巾羅
羽織扇子戦之時甲胸当立川の大大主髪

黒縹子入道頭巾黒袖衣裳黒縮緬広
袖羽織脚胖足袋砂田の子黒西洋布
入道頭巾黒木綿衣裳脚胖足袋

但中入之時より立川砂田黒縮めん広袖

羽織編笠杖浜崎のひや伊豆味下庫

理外間の子金の塵持ちちやうちやく持

謝名の大主供支度同断

一 出様ちやる者や、天願の按司の頭役しゆ

たる謝名の大主、あゝ浅ましや此身

黒髪に雪の、積るとしまても人の

下知受て、朝夕胸内に煙りたか¹⁷ よいか、

主人打果ち按司の身になやひ、夢の

間の浮世榮すらんともて、色欲よ進め

明間うかゝやひ、討捕んでやり様々にしや

すか、聞立もすらぬ義理守てをれば、

【031左】

【032右】

【032左】

願事や叶ぬ気の毒とやたる、あゝむちや
る三日に原遊ひすゝめやひ、戻る道中
に伏勢よ置て、思たこと按司やうち
すまちあすか、城内になし子跡方も
なひらぬ、気の毒とやゆる気障とや
ゆる、やあ富盛大主川崎のひや平田

三人

の子、一 ふう、

謝名

一 やあ、思たこと叶て按司も打果ち、衆も

衆いらて誇らしやとあすか、城内になし子
あとかたもなひらぬ、又久志の若按司や
天願の別れ、嫡家ほろふされたゝ
やてやをらぬ、天願の若按司助けやひ
ふたり、命ちふり捨て弓ひきゆらとめは、
気障とやゆる事障たひもの、先久志の
城元に軍押寄て、急ち若按司打果ち
からに、天願のなし子さがひし改て、根葉も

茹捨て我肝やすま、

【033右】

【033左】

三人

一 拝留やへて、

平田

一 あはめしやいること、あのふたり世界に
いきて置からや、跡々の障り御氣遣と
やゆる、片時も急ち打とやいきやへら、

富盛

一 やあ按司かなし、久志の若按司や世界に

立ぬけて、義理も分別も人並やあらぬ、
又あの大親立川の大主と砂田の子二人や、

世間沙汰されるつはものよやれば、
自由に討捕ゆる敵や又あらぬ、天願の
城討よほろふしやい、御万人の心おて
つかぬ¹⁸ 内に、城よ立出て城よはなれ
やひ、遙々と久志に軍押¹⁹て、もしか
此城に一大事のあらは、百悔みしちも
益や又なひさめ、今程や城に堅打守て
時節計らやら^{ママ}ひ軍寄やへら、²⁰

【034右】

【034左】

川崎

一 やあ按司かなし、久志の城元に軍寄

ゆすや、大主のいやれること先やみに

めしやうち、急ち島々に、廻文よ通ち、

天願のなし子生捕にとやひ、久志の

若按司の降参よしゆらは、天願のなし

子かへち渡さてやり、久志の若按司に

文よつかはさは、なく、もこまにくたて

こんしゆもの、おの時にふたりころちすてやへら、

一 やあ大主やあ川崎のひや、言うこと聞は

ことはりとやゆる、急ち手わかに島

島よ廻て、天願のなし子からめ出すものや、

とり位も付て島知行も呉ゆん、若

隠ち置ものや、一門やたにも引はらふし

までも生責よしゆんで堅く言渡ち、

片時もはやくからめ出ちくう、

富盛

一 押留やべて、

*035
【右】

*035
【左】

謝名

一 たう、急け、

天願の若按司思なひ出羽散山ふし

一 生れらぬむまれおめなひとわ身や

あさゆちのなみた袖よぬらち

若按司

一 天願のなし子千代松とやゆる、按司添か

事や謝名の大主に、殺されよめしやうち

哀れあや前も、みたれ矢に当て消よ

はてめしやうち、二所の親に捨られて

をれば、あてなしの思なひ朝夕鳴暮ち、

百すかひすかてはなすことならぬ、わ肝

きへ、と互に袖しほて、死にやんでやり

しゆすか親の敵かたき、うたな徒に

死もまたならぬ、久志の若按司やわか従²¹

やれば、あれ頼てからに忍ひ隠れやひ、

時節待受て敵討んともて、おめなひよ

つれて忍て行ん、

天願の若按司言は并道行きんふし

一 久志の城元やあかり表てもの、

*036
【右】

てたあかるかたにとまひていきゆん

【036左】

乙鶴

一 やあ舎兄前よ、長道のつかれ足もひかれらぬ、こまにあしよとてしはし休みやへら、

若按司

一 やあ思なひよ、夜も暮ておれはこまをてやすまぬ、あの村に便てあしよやすま、
たう 〱 気張れ 〱、

同人

一 此宿の内にもよおんにゆけら、

宿主

一 たるかやゆら、

【037右】

若按司

一 哀れ首里方の者とやゝへすか、闇の夜のくらす先行先も見らぬ、御情に一夜からちたはふれ、

宿主

一 やあいきやることやとて童へあてなしの、たゝふたりつれてまかひいきゆか、

若按司

一 国頭に思事のあてといきやへすか、闇の夜のくらす先行先も見らぬ、頼て御情からちたはふれ、

【037左】

宿主

一 はあ見れは此ふたり只人やあらぬ、慥か天願の思子とやゆる、あゝむちやる目のいちやさ助けほしやあすか、天願のなし子隠ち置ものや、一門やたにもひきはらふしまても、切殺ちすてられんてやり御触のあもの、こまからや急ち出てたはふれ、

若按司

一 やあ 〱、闇の夜のくらす雪霜や降り、思なひもなけは肝もきもならぬ、たんで御情からちたはふれ、

【038右】

宿主

一 いや思子宿からちわか命ちとよめ、たう 〱 急ち出てたはふれ、

若按司

宿主

一 やあ 〱、 一 いやならぬ 〱、

子持ふし

一 あきやう憂苦しやおめなひとわ身や

、 巢なき鳥心やとるかたなひらぬ

冬の夜のよすか雪霜にぬれて

なれぬ山路や歩いてあゆまらぬ

日本くら 〱 となるか心気

乙鶴

一 やあ舎兄前よ、のかすやき前やあし

まめきめしやうる、

若按司

一 やあ思なひよ、此間のつかれ足もひか

れらぬ、わきもきえ 〱 となやひ行ん、

乙鶴

一 やあやき前よ、山路やくらさ雪霜も

ふゆひ、御気張よめしやうれ村に出やへら、

若按司

一 やあ思なひよ、村便ててやり哀れこの

【038左】

【039右】

二人に、片時も宿よからしゆすやをらぬ、

やおめなひよ、此間のつかれ歩いてあゆ

まらぬ、頓て消果る露の身とやすか、

闇の山路にすてゝ先ならば、あてなしの

おめなひやいきやかしゆゝら、

乙鶴

一 やあ舎兄前よ 〱、のかすやき前や

ものい声もなひらぬ、

東江ふし

一 あけいきやかなゆら

富盛大主

一 是や富盛大主、天願のなし子さかいし

あらために、夜昼もかけて島々に

行ん、たう 〱 いそか 〱、

供二人

一 御供しやへら、

富盛

一 やあ、いきやることやとて童へあてなし

の、かある山路に声立て鳴か、

【039左】

若按司

一 やあ、哀れ此二人や首里方の者よ、

*040 右

国頭に思事のでていきやへすか、闇の
夜のくらさ行先も見らぬ、一夜明さ
てやりこまに居ちをる、

富盛

一 やあ供のきや、見れば此ふたり只

人やあらぬ、天願のなし疑やないらぬ、

たう、急ち縄よかけれ、

供

一 拝留やへて、いきやか、

若按司

一 やあ、天願の若按司や謝名の

*040 左

大主の、ゆるちゆるさらぬ敵かたきやれば、
誠天願のなし子ともやらは、縄もかけ
ゆらはいか程もかけれ、人まかいよめしやう
ち罪科もなひらぬ、此二人にのよて
縄よかけめしやいか、みすく見分やひ
ゆるちたはふれ、

富盛

一 いや、人まかひもあらぬ見すまちとをゆる、
おかたちよとまいる道中とやたる、

*041 右

責縄のうるさにやへもこんせめれ、

供

若按司

一 いきやか、此涯よやれば隠ちかく

さらぬ、実よあらわれて願よおんにゆ

けら、誠天願の若按司とやゆる、これや

守やかあなし子乙鶴よ、運たらぬわ身

と列てきやる故に、罪科もなひらぬ

なわよか、ゆるすや、肝もきもならぬ

ことよ又たひもの、わ身や責よりは

*041 左

いか程もせめれ、あてなしのこれや
ゆるちたはふれ、

富盛

一 いや推参なこといふな、

さあ、たちやうれ、

一 供

さあ、たちやうれ、

若按司

一 あゝ口惜や残念、義理情けしらぬ

野心なやつはら、

富盛

一 生さかしむさの言うことのにくさ、責

繩のうるさにやへもこんせめれ、

供

一 拝留やへて、いきやか、さあ

たちやうれ、

揚七尺ふし

一 のゝつみもなひらぬ、敵の手にかゝて

あはれなまころしされらとめは

富盛

一 やあ供のきや、島々よ廻て里々よ

めくて、此間の疲れ足たるさあもの、

東恩納番所に一夜明さ、

供

一 拝留やへて、

*042
右

*042
左

富盛

一 たう、いそか、

供

一 さあ、急き、

同

一 さあ、あゆめ、

久志

一 出様ちやる者や久志の若按司、天願

の按司や御運つきはて、謝名の

大主の謀叛事巧て、按司もをなちやらも

殺されよめしやうち、はかなさや嫡子

千代松か事と、野山から下りさかいさ

しゆんてやり語ひへのあとてなまと

わなひきちやる、あゝ口惜や残念、やあ

大主²² やあ砂田の子、身にかへて千代松や

助らんしゆもの、片時も急ち島々よ

めくて、千代松か行衛尋出ちからに、

敵討ることにはからやひ給ふれ、

立川砂田

立川

一 拝留やへて、一 や²³ 按司かなし、此

*043
右

事やいへも油断しや濟ぬ、いそち

手分りに島々よ廻て、若按司の御行衛
たつねやひきやあへら、

久志の若按司

- 一 やあ大主、此支度しちや尋ねいやならぬ、
互にうちやつれ忍ふ編笠に、ふかく
顔かくち急ち出ら、

立川大主

- 一 をかんちゆめやへて、

久志の若按司

- 一 やあ大主やあ砂田のし、手賦のことに
美里から越来、具志川与那城勝連に

立川

忍は、一 たうく御供しやへら、

- 一 命ち限りの出立に有しさまかへ編笠に
深く面を隠してそ久志の山路わけ出て
ゆけは程なく金武の寺御宮立寄
伏し拝み南無や観音大菩薩慈悲の
切^マ徳や千代松に急ち引合ちたはふれ

【043左】

【044右】

てやり心に念し礼拝しいさやくくと
立出て伊芸や屋嘉村行過て歩み

かねたる七日浜石川走川打渡てゑひ
なまと美里の伊波村に急きいそひ
て忍てきやる

砂田

- 一 され美里伊波村につきやへたん、

若按司

- 一 たうく、宿々の数や残らすに忍は、

兩人

- 一 拝留やへて、

附此時瀧落にて三人手配を以忍
の手ある

砂田

- 一 され、天願の若按司と思妹の前や、
富盛の生捕にとやい、東恩納番所に
宿かやいをんて、此村の頭から細く
きちやへたん、

【044左】

【045右】

若按司

一 あゝたうと、願たこと叶て今の引合や、誠観音の御助けとやゆる、たう、油断しやすまぬ急か、

兩人

一 御供しやへら、

按司

一 やあ、東恩納番所につきやん、
やあ、砂田の子、事おへさしちや大事あらむしゆもの、謝名の使てやりたしぬきやひ出す、我身やこまなかひ待受てをとて、にくひ生やから切殺ちすてら、

平田

一 拝留やへて、

按司

一 やあ立川の大主や、勝手から忍て内にふみいやひ、急ち千代松列ていまふれ、

立川

一 拝留やへて、
一 やあ富成²⁵大主、按司

砂田

【045左】

【046右】

かなし御支²⁶にくたてきやあへたん、

富盛

一 按司かなし御支²⁷やたるかやゆら、

按司

一 やあ富盛、久志の若按司しつちをため、

富盛

一 はあのを事かやゆら、

砂田

一 いや、悪慾のむくひなまとおめしゆら、

天願の若按司

一 やあやき前よ、

東江ふし

一 かにある引合や夢かやゆら

天願の若按司

一 やあやき前よ、謝名の大主の謀叛事

巧て、按司添もあや前も殺されよめ

しやうち、残る此二人もころさしゆん

てやり、野山から下りさかひさしゆんで

あれは、頼む方をらぬやとる方ないらぬ、

思なひとふたりやき前よとまひて、

【046左】

よしれゆる道中にあのやからむさに、
生捕にとられ殺されるいのち、かにある

御助や夢かやゆら、

久志の若按司

一 やあ千代松やあ乙鶴よ、按司添も

あや前も御運つきはてゝ、謝名の

手にかゝて殺されよめしやうち、あゝ

口惜や残念、やあ千代松、なきやん

てやりきやしゆか互に思切ひ、いそち

わか城に立戻てをとて、時節待受て

敵よ打とらに、

天願の若按司

一 やあやき前よ、よたしやあるやうに

御計よめしやうれ、

立川

一 あゝ拝てなつかしやゝ袖のなみた、やあ

若按司の前、互に肝揃て美腰たち

すらは、かたきうちとゆす手の内とやゝ

へひる、

*047
右

*047
左

天願

一 よたしやあるやうに計らやひ給ふれ、

立川

一 をかんちゆめやへて、

一 やあ千代松、悪たくむやから生て

置ならぬ、肝のあくまゝに殺ち捨れ、

富盛

一 やあ按司かなし、願ことのおものおん

にゆかて給ふれ、けふからや心引よ改て、

夜昼もみやたり働かんしゆもの、露の

身の命ち助けやひたはふれ、

久志の若按司

一 悪巧むゝさと肝合ちをたる、罪科の

いきやしゆるちゆるされぬ、やあ千代松、

たう 〱 急ち殺ちすてれ、

富盛

一 あゝ、押かへし 〱 おとろしやとあすか頼て

願ことやおんにゆかて給ふれ、謝名か悪

欲の罪深さあることや、兼てからわ身も

*048
右

*048
左

しりづゝとやすか、あれかしなさけも
受てをる故に、捨てすてららぬたのて
をやへたる、あゝなまされる命ち御助
のあらは、此御恩美拜やいつし忘やへか、

慈悲よ御情けにゆるち給ふれ、

【049右】

久志の若按司

一 やあ大主やあ砂田の子、富盛大主の

願ことよきけは、殺しゆすや忍はらぬ肝

苦しやあもの、得と此事や考て給ふれ、

立川

一 やあ按司かなし、此やからむさの今の

い言葉や、偽とやゆるゆるちすみやへらぬ、

急ち引立て殺ちすてやへら、

久志の若按司

一 やあ大主、人の生死にかゝる願事や、身の

上に引当て思らねはすまぬ、富盛大主

の露の身の命ち、慈悲よしちわ身の

助けゆる上に、義理背ちいちやし謀叛

企ちゆか、此事やつく、と了簡よされ、

【049左】

立川

一 あゝめしやいること、命ちより重さある
ものやあやへらぬ、やあ砂田の子、仰す
こと得と考て見れば、是程の御慈悲
蒙てのうへに、謀叛企ちゆる肝の忍はれぬ、

【050右】

砂田

一 され按司かなし、やあ大主、こへな事

俄に決断やなやへらぬ、籠舎しめ

おきゆて先考てみやへら、

久志の若按司

一 やあ砂田の子、富盛大主の命ち助け

やひ、敵討る計ひ頼ほしやあもの、

是非に此事や、我身にうちまかち呉れ、

たう、疑てやすまぬ、わか下知のことに

急ちときゆるす、

【050左】

砂田

富盛

一 拝留やへて、一 あゝたうと、いのち

たすかたる此御恩美拜や、胸におめ

染て肝に思留て、夜昼もみやたり
肝もきも尽ち、百とわれてふわれ
をかてすてやへら、

久志の若按司

一 やあ富盛大主、謝名か悪欲の罪深さ
あすや、天願の按司の御情けやふかく、

【051左】

身に余るまでもかふむやひをとて、謀叛
企ちやひ生樂よ好む、罪科のいきやし
凌きしのかれか、やあ富盛大主、天の
御助けか神の引合しか、謝名か頭役川崎
のひやか、謝名事と朝夕酒と色好み、
百姓したけやひおこり日にまさて、御万人
のまきりなきよ恨めとて、くりかへち
本の御代まちやいをもの、時節衛衆て計らやひ

【051左】

謝名の首とやひ、天願の御恥すゝき
あけらてやり、文のかよはしに、内通のあもの、
大主や急ち立戻てからに、川崎のひや
とふたりかたらやひ、敵討る計ひ内通よ

富盛

され、一 をかん留やへて、

富盛

一 やあ立川の大王、川崎のひやかなまの
ことやれば、謝名か首とゆす疑やなひ
らぬ、やあ大主わ身や立戻て謝名に

【052左】

返答や、天願の若按司や久志の按司
頼て、万事敵討る手段しゆんてやり、
かたひとすらは謝名の大王や、さはき驚ワトキヤひ
せめかける筈、おの時立川の大王と砂田
の子二人や、つわものよ引列て金武
のたけなかひ、伏隠れとて謝名か旗
印、伊芸屋嘉のあたり走通る時「欠」²⁸
一時に出てすゝむ道ふさき、いきも「欠」²⁹

【052左】

さすに平責よされ、又川崎とわ「欠」³⁰
謝名かひきかへち逃よ走ゆらは、うし「欠」³¹
取かこて殺ちすてら、

立川

一 やあ富盛大主、なまのことやれば誇ら

しやとあゆる、謝名か首とゆす疑や
なひらぬ、頼て此事や計らやい給ふれ、

久志

一 やあ富盛大主、今のこやれはほこら
しやとあゆる、川崎のひやとふたり

かたらやひ、細々のこや内通よされ、

富盛

一 をかんちゆめやへて、

同人

一 やあ按司かなし、此事やいへも油断
しや濟ぬ、たう、御暇よしやへら、

久志

一 たう、肝も肝添て働きやい給ふれ、

富盛

一 拌留やへて、

砂田

一 され按司かなし、富盛大主の謝名の
恩情や、かそる数しらぬ身に請て

をれば、たとひ寸々にぎざまれやしちも、

【*053
左】

【*053
右】

謝名にうち背ちのよてくたやへか、
今のこと葉や偽とあゆる、急ち追
付て殺ちすてやへら、

立川

一 はあ、しはしまて、やあ砂田の子、
富盛大主の偽の上に、ぬきかへちうちゆる
御計とやゆる、

久志

一 やあ、砂田の子、大主のいやれること富盛

大主の、たくておることや合点とやゆる、

つわものゝまきり金武嶽にやらち、

千代松とわ身や城元に残ち、打捕ん

てやりたくてをることや、い言葉の色に

あらわれてをてと、偽の上に計こと

めくらしやひ、ぬきかへち討る分別と

やゆる、又川崎のひや、人に勝れとる、

つわものよやれば、跡々の障り、あれ生て

おきや謝名に打かちゆる計ひのならぬ、

此事や一期気にかゝてをてと、謝名の

【*054
左】

【*054
右】

手にかけて殺さゝんともて、富盛大主
たしぬきにぬきやる、

砂田

一 はあ今の御計のあることや我身の
兼て夢程もしらぬあやへたん

立川

一 やあ按司かなし此事やいへも油断
しや済ぬ片時も急ち城に立戻て

敵よ待うける計しやへら

久志の若按司

一 たう 〱 急か 〱

謝名

一 やあ平田の子川崎のひやや敵と肝
合ち謀叛企ちやい内通よしゆる族
生て置ならぬこんしまてきやうれ

平田

一 拝留やへて

同人

一 御万人のまきりたによ聞留れ

此やからむさと御主人に背ち謀叛

【055
*右】

しゆる科に殺さしとめしやいんたう
たういそけ 〱

川崎

平田

一 やあ平田の子 一 いやものことのおほさ
急け 〱 たう 〱 居やうれ 〱

一

され川崎のひやせまてきやへたん

一

やあ川崎いきやることやとてわか恩義

わすて敵と肝合ち謀叛企ゆか

川崎

一 やあ按司かなし御主人の御恩

山よりも高く海よりも深く思ひしゆる

わ身のよて悪たくて謀叛企ちゆか

神仏かけて偽やあやへらぬ頼て

つく 〱 〱 と思てたはふれ

謝名

一 いや胸に悪巧て口に花さかそ島国
のやから生て置ならぬ急ち引立て

殺ちきやうれ

【055
*左】

【056
*右】

川崎

一 あゝ口惜や残念やあ富盛大主落る

*056
左

此首やおしさ又ないらぬあにあるてき
かたにうちよたまされて主人かた
くつらあまた御万人も頓てやみ
となゆらとめは

謝名

一 いや押かへし 〱 過言しゆるやから逆も

一刀に切殺ちすてら

平田

一 やあ按司かなし謀叛しゆるやから殺ち
すてめしやうちわすた供つれも誇ち

しやとあやへひる

*057
右

謝名

一 やあ大主やあ平田の子久志の若按司
やすくれものてやり世界の取沙汰に
肝さはきをたんはあ思たこと替て
今のことやれは一鼓にうちとゆす疑や
なひらぬけふ明る廿日よかる日よやれは

久志の城元に軍押寄て二人の按司

打果ち我肝やすま

*057
左

富盛

一 やあ按司かなし久志の若按司と約速^マ₃₂
のことに内通の書状かきよ調やい急ち
夜通しにもたちやらしやへら

謝名

一 たう 〱 急け 〱

久志の若按司

一 やあ千代松富盛大主の只今の丈^マ₃₃や
けふ明ふ廿日軍寄ゆもの約速^マ₃₄の
ことに金武の嶽なかい伏勢よしち
をて待請^マ₃₅れてやり内通の文や是と

天願の若按司

やゆる 一 やあやき前よ今のこと
あれは誇らしやとあゆるよたしやある
やうに御計よめしやうれ

同人

一 やあ大主 文立川の大王江渡す

*058
右

立川

一 やあ按司かなし此文よ見れば御計

のことに川崎のひやゝ大主の手にかゝて

殺されよしちやす疑やなひらぬはあ

川崎のひやか今のことやればかたき

うちとゆす手の内とやゝへひる

久志の若按司

一 やあ大主急ちおれ 〱 の手組言渡さ

立川

一 拝留やへて

久志の若按司

一 やあ伊豆味下こうりや金武の嶽

なかひ薄煙立て伏勢の様子敵に

いつみ下庫理

見せれ 一 拝留やへて

按司

一 やあ砂田の子や本門の東山中に

ふかく伏よ隠れとて謝名の大主の

東原にのそて逃よ走ゆらは一時に

【*059 右】

【*058 左】

出て殺ちすてれ

砂田

一 をかんちゆめやへて

一 やあ浜崎のひやゝ久志嵩に深く

ふしよかくれとて謝名か西宿に逃よ

走ゆらはすゝむ道ふさぎ殺ち捨れ

浜崎

一 拝留やへて

按司

一 やあ外間の子や城の南の小林に

深く伏よ隠れとて謝名か軍勢の

城の門内にふみ入ゆる時分相図の

かねのならはうしろからせめれ

外間

一 をかむちゆめやへて

按司

一 やあ立川の大主や本門の内に忍ひ

隠れとて謝名か門内に入ゆす見掛

らは七重八重かこて殺ち捨られゝ

【*059 右】

【*059 左】

立川

一 拝留やへて

按司

一 又千代松と我身や時の声よきかは
物見走登て敵の軍勢さそへ入ら

惣人数

一 拝留やへて

按司

一 やあ千代松手賦の濟ち誇らしや
とあゆる習とたる手並振立て

天願の若按司

見せれ 一 礼

揚作田ふし

一 朝夕たしなたる長刀の刃さき

てきのくひすちにたくなおきゆめ

久志

一 やあ千代松振立すみれば嬉しさと
あゆる城に立戻て敵よまたに

*060 右

*060 左

天願

一 一 礼 一 やあ 一 時うつち濟ぬ

謝名

富盛

急か 一 御急よめしやうれ

謝名

一 はあ金武のたけみれはうすけふり

たちゆん伏勢の様子疑やないらぬ

たう 急か

富盛

一 はあ久志の若按司の運の末なたら

*061 . *062 右

わか謀ことに心うちゆるちあれ

御目掛れ本門も開ちをやへいん

急ち走寄ひ時の声よあけら

同人

一 やあ久志の若按司富盛大主の偽に

いちやるい言葉や誠実とめてをたら

快く急ち首よ渡す

久志

一 やあ富盛大主偽の巧み夢程も

しらぬつわものまきり金武嵩に

【061・062左】

やらち此城の内や千代松とふたり
たゝかはぬすれば力及はらぬあゝ口惜や

残念 一 やあ / 急ち責³⁶ やい切殺ち

惣人数

すてら 一 ひやあひやい

久志

一 やあ謝名の大王此按司のはかりこと

しらぬあため

謝名

一 あゝ謝名ほとの名将も運の未なたら

たしぬきにぬかれ川崎もころち

おかたちか手にかゝて生捕にとられ武士

の身の恥辱面目もなひらぬ

たう / 快く急ち首よとれ

久志

一 やあ富盛十度ときゆるち十度生

とられ此按司に向て弓ひきゆんでやり

巧てある褒美殺さゝんしゆものあり

かたさ思てあの世とつけ

【063右】

富盛

一 あゝ武運つき果て生捕にとられ

【063左】

武士の身の名折面目もなひらぬいやもの³⁷

謝名

一 いやものことのおほさ快く急ち首よ

天願

渡す 一 此やからむさや見ればやすまらぬ

久志

一 はあ / しまてやあ千代松この

やからむさの悪欲の罪や一刀にしちや

罪あさゝあもの久志浜に引出ち

旗門³⁸にあけれ

浜崎国吉

一 押留やへて

【064・065右】

久志

一 やあ浜崎のひややあ国吉の子急ち

引立て籠舎しめれ

兩人

一 押留やへて

立川

一 やあ 〱 おれ 〱 の番手油断するな

浜崎国吉

一 をかんちゆめやへて

同人

一 さあ 〱 たちやうれ 〱

同人

一 さあ 〱 いすけ 〱

天願

一 やあやき前よやあ大主互に肝

*064
・
*065
左

揃て働きやる故に親の敵かたき討捕い

けふやすきし二所も嬉しやめしやいら

久志

一 やあ 〱 かたき討捕るけふの誇ら

しや 〱 押つれて互に踊て戻ら

しやうんかないふし

一 かたきうちとたるけふの誇らしや 〱

天のしら雲にのほるはかり

*066
・
*067
右

千代松 亀千代出羽千瀬節

一 つれなさやふたり親に捨られて

互にふやかれてをるか心気

千代松

一 哀れ知りめしやうれ今出る二人や南山

の頭役与座の大王の兄子千代松

弟子亀千代親の大王と按司かなし

御使に御詔事拝て北山にいまふち

引よ留られて御素立よてやり朝夕

母親の寄こと 〱 聞るあけやうはかなさや

*066
・
*067
左

十とあまるまでも敵の手にいまふち

こめられてをれば此間のくれしや

いきやか又めしやいら子なゆるものや

やすてをられらぬ亀千代とふたり

命ちおめはまてしらぬ山国に

とまひてむちからに北山の按司の

御肝取直ち二人か身にかへて父親や

助けふしやあもの母親にこのやう

*068
右

暇乞よかたて片時も急ち忍て

いかに 一 天と地の中に生とる者や

鳥もけたものも情けあるならひ

やき前とふたり人に生れとて子と

なる道のたゝなあてからや大事あらん

すれはおとろしやよあもの片時も

急ちとまひて行からに哀れ父親よ

取帰ちふたり人に生れたる道よたてら

千代松

一 やあ母親よ

仲間ふし

一 のかす思童へものめかほしちをる

おもことのあらは語てきかす

千代松

一 すたし母親も聞留てたはふれ朝夕

思尽ち語ゆることに亀千代とふたり命ち

おめはまて北山の城とまひて行からに哀れ

父親よ助けらんしゆもの是非よ聞分て

暇乞てたはふれ

【*069 右】

【*068 左】

一 やあなし子今のことやれは誇らしやと

あすかあてなしのふたり知らぬ山国に

いきやし手はなしやひゆるちやらされか

我身も諸共につれていかに

千代松

一 やあ母親よ男生れとて年の十二三

あてなしとめしやうなおのとしになれはいかな

刀刃ものよておそれゆか母親と共にまし

列てむきゆて若か路ふちに怪我のとも

【*069 左】

あらは願ておる事もあたになててやり

不孝の罪報しのきしのからぬ科の上に

咎や重なゆるつもり是非よ聞分て

頼て母親や父親の御戻り御待

めしやうれ

一 やあなし子言うこと聞は理とやゆる

願のことふたり暇取らしゆもの物思つめ

しちをて油断するな

【*070 右】

一 今のことやれは誇らしやとあゆる

一 親の為ともてゆるちやらしゆすかいきや

し思くらち我身やまちゆか

一 やあ母親よ親に孝行の念力の太刀や

岩やかんしきも当る方われてのよて

真実のあたに又なゆか頓て父親よ

列てこんしゆもの肝の願しちをて御待

めしやうれ

一 互に言語やいやはいつきやても時移ち

すまぬ御暇よしやへら

一 義理ともて我身の思きやいをすか

わかれゆるきはや袖のなみた

一 やあ亀千代丸陸からや今帰仁程遠さ

あれはしらぬ山路にいつし尋ねゆか

舟路漕渡て急ちほしやの

一 順風のけふや波も又ないらぬ真鱸

押風につれていかに

舟筑

一 いまひのかち

伊計離ふし

一 真鱸おす風になみもおしそへて

運天のみなとなまとつきやる

舟筑

一 され運天の湊着へたん

千代松

一 かほし舟筑渡ちたはふち廻り逢

ときにまたもたのま

舟筑

一 またもをかみやへら

千代松

一 やあ亀千代片時も急ちあの村に便て

あはれ父親の行衛尋ねらに

亀千代

一 互に思尽ち尋ねやひきやすか若か

あたならはいきやか又なゆら

千代松

一 命ちふり捨て君親の為に肝尽す

ことのよてあたたなゆか油断そな互に

物めつめて

*071
【右】

*070
【左】

*071
【左】

住居人

一 むゝ舟の入ゆる様子先出てむたねはならぬ

はひ 〱 ねつたあやまあからやひめ

千代松

しやいか 一 哀れ此二人や思事の

あとて遠方の島から旅のものやすか

知る人もをらぬ頼む方なひらぬ御情に

しはし宿からちたはふれ

住居人

一 あゝ宿かひめしやうらしゆや手易ひ

事先まあの国のうむていやれめ

しやいる人のきやあか御二所の御様子

細々と語てたはふれ

千代松

一 此上よやれは隠ちかくさらぬ南山の

頭役与座の大主の兄子千代松弟子亀千代

住居人

一 あゝ与座の大主の思子のきやあとやい

めしやいるひむゝ得と拝てむてはまあも

*072
右

*072
左

かはらぬよう似ちいまひんしやいんあゝ

ねつたあや拝てむては年頃十二三の

御様子あゝさて親かなしいとの別れかたや

先ものにたとてむてはちやうと二所共鳥

小のひや 〱 しゆる時分とやたひすか

人の親子やたいんなものなしおとつて

親やのふあてもなひらぬしゆてあて

なしのきやのこかとふついてもしらぬ所ん

かひ親拝みいかむていまひんしやうち

なあおんさうかいやたうものさうすや

しめんしやうんな先おかんちうたやへる

又ねつたあ親かなしいと十一年なでの

三四月頃南山の御使にまひんしやう

ちやれは按司の御側に物巧みしやうる

親泊大主むていやれる人の按司に

色々美よんにゆけて与座引とめて

南山の様子委細聞合しゆる分別やて

按司からの御心実段々とのこと又十七八の

女性方拝領やて度々御酒盛大主の

*073
右

*073
左

*074
右

御取持大粧至極むちや大主も果報な

人たやへるあんし大主も御暇みよん

にゆける隙やないらぬけふの明日ない明日の

あさてなひ頓て夫婦の縁につなかつて

あけての冬にや男子繁昌弥事六ヶ敷

ない立又々次年にや次男迄なし出しめ

しやうちおれからや御めいとんたの中

又思子のきやあのかちすかり 〱 〱 しめ

*074
左

しやうれは故門³⁹の事も思出し 〱 〱 泣

しよたれしめしやいす聞はあゝ至極

哀れたやへる

千代松

一 やあ亀千代ふたり命はまでとまひ 〱 〱

にきやすか今のことやれはいきやかしゆゝら

亀千代

一 やあやき前よ兎角此国にいつまでも

とめてむすてある縁に思ひ引されて

妻なし子捨て隠れやひいまひら捨ら

*075
右

れる親子いきやかしやへら

住居人

一 あゝ人の上むてもおまあらぬされ此

ことやいへも御世話あめしやうむな

なまさきおんにゆけよたる大主の

あやあとむちやなての若夏に此世

見捨やへておれからや大主も思子の

きや引進の為大原に廻て鎌手唐手

鎗長刀不足なく武芸の数々御嗜みの

*075
左

御様子おの事と大主や跡先帰ゆすや

合点やこと子のきやあに武芸御指南

めしやうち按司の御腰立からめかしゆる

御計むていやへん此事や按司に願筋

美よんにゆけて済ぬかきりやきやしも

ならぬなまつんとゑひ拍子やすや按司の

大将に謝名の太主むていふる人のこの

ころ按司に諫言しち御仕置もゑひ

*076
右

ころ取直ち与座も早く国元にかへしめ

しやいることむておんにゆけめしいる謀取

むていやへん片時も早く願ひ立め
しやいへれ

千代松

一 今のことやれは誇らしやとあゆるやあ
引合しの御縁拜む御情けに段々の肝入
いちも尽さらぬ此御恩一期ちゝにかめら

住居人

一 たうけふや先我宿におんつかいしち御休〔欠〕⁴⁰

*076
〔左〕

めしやうち明日にしち随分御願濟しめしやい〔欠〕⁴¹

一 是や南山の臣下与座の大主あゝ国々〔欠〕⁴²

按司部勢ひ争やい軍事起ち国よ疲ら

しゆるわか主人按司やすてやすまらぬ

南山十五ヶや討よ平らけて先や四方の海

波風も立ぬ按司の御喜ひ御万人のまきり

安て楽みゆる時と又やすか北山や今に

軍事やまぬ殊に南山たはかゆる含み

*077
〔右〕

てやりあれは此事よ主人按司御氣

の毒めしやうちたかいにあらそいのこゝろ

とりおさめ北山と南山和睦なる

やれは御万人のまきり上下も

ともにいちこたのしみにくらそ

てやりともて美よんにをかてきや

る事とやすか十年あまるま

てもひきよとめられて何分の

御返事たえてなひぬなゆゆ

あれはいたつらに年月おくる

しんきいちやんてやりきやしゆか武

士の身の習ひの心うつしちをて

くらちをぢひならぬけふや名にたちゆる

三月の三日なれしふるさとの名残

たちまさて子共ひきつれて

遊てわすらやあゝ虎千代虎松も

押つれて

出やうれ

〱

与座道行言葉

一 野原出て見れは千種萌出て吹送る

風の匂のしほらしやたう〱此辺に

をとて花よ詠めらに

*077
〔左〕

*078
〔右〕

同人

一 やあ 〱 なし子春の草の葉やみとり
さしそひて見ればとし寄もわかく
なゆさ

虎千代

一 やあ父親よ又も春来れば木草たいも

しゆひやかて父親もむかしくり戻ち
花さきゆる節もあひとしやへる

与座

一 されは 〱

与座

一 やあ 〱 けふの誇らしやゝ物にたと
られめたう 〱 習ひとたる手並振立て

虎千代

見せれ 一 おう

与座

一 たう 〱 習ひとたる手並残らす
に見せれ

与座

一 あゝ出来た 〱

〔078〕
左

与座

一 やあ 〱 虎松もひとつ振立ひ見せれ

虎松

与座

一 おう 一 あゝ出来た 〱

虎千代

一 やあ父親よ南山もけふや此遊ひ
あやへひめ

与座

一 南山もけふや段々の遊ひ野原から
浜辺歌や舞ひ遊て是よりも増る

にきやかとやゆる

虎松

一 やあ父親よおれ程の増る国やてと

与座

兎角一期南山の沙汰よめしやら

一 いや 〱 おか達かおのほとになやいまた
をれば南山の事もいちゆて慰みゆん
互に言語ひやいつまでもあかぬ日も
暮ていきゆひてよ 〱 宿に戻ら

〔079〕
右

〔079〕
左

恩納ふし

一 戻る道すからかたるいこと葉や

きゝゆる袖までも露とおきゆる

千代松 亀千代 出羽長金武ふし

一 情けある人のことの葉の匂ひ便て

行先や頼む親泊今と御城元尋て着る

亀千代

一 御門番所御取次頼ま 一 たるかやいめしやいら

千代松

一 南山の臣下与座の大主の兄弟子千代松

弟子亀千代按司かなし拜て願事のあとて

よしれやいをる次第御取次頼まよたしや

有様におんにゆけてたはふれ

門番

一 此様御取次しやへら

同人

一 され拜まれよめしやいんこれにいまふれ

千代松

一 哀此二人や与座の大主の兄子千代松

【*080右】

【*080左】

弟子亀千代父親の事と十と余る迄も

御引留られて別やいをれはいきやかいき

なひになやい又いまひら思ひ身にあまで肝も

きもならぬ亀千代とふたり命ち思はまて

波路はる 〱 〱 とよしれやいきやへたる慈悲よ

父親やゆるち給ふれ若かおゆるしのならぬ事

やは此二人やこまに引よ留めしやうち

是非共に父親やゆるち給ふれ

亀千代

一 やあ按司かなしやき前とふたり人に生れ

とて子と成道の立なあてからや天道の

下をとておとろしやよあもの頼て願事や

美よんにゆかてたはふれ

按司

一 あゝ童へあてなしの願事のしほらしや聞る

袖迄も露とおきゆるやあ千代松亀千代

屹度肝付て返事よさんしゆものおの

内や先客屋に扣てをれやあ仲宗根の

ひや急ち客屋につれていけ

【*081右】

【*081左】

仲宗根のひや

一 をかんちゆめやへて

同人

一 たう 〱 御供しやへら

按司

一 やあ 〱 ふたりおしつれて今の

ことやれはきやああれはすみゆか

考てきかす

惣人数

十 おぢ

惣人数

親泊大主

一 おう 一 され按司かなし与座の

大主と此国の様子細々の事も吞込いをや

へれは若か南山の取帰ち跡に御恩うち

背ち物巧みあらは事や六ヶ敷成立る積り

親子諸共に引よ留置て年月よ重ね

御恩蒙らは世々の御譜代同前に思て

按司かなし御奉公思はまる管たひもの

此節に御肝付およたしやゝあやへらに

【082左】

【082右】

仲宗根のひや

一 親泊いられること此国の仕置事洩て

すまぬ急ち此事や御究よめしやうれ

按司

一 一段なことよ 〱 やあ 〱 謝名の太

主やいきやか 〱

謝名の太主

一 され此事や兼々美よんにゆけることに

南山の御所存考てみやへれば北山と南

山や共に天かめて互に地やふまぬ敵や

又あらぬ一時の威勢争の為に国よ

疲らしやひ人よそくなとて軍事しゆ

すや道ならぬあれは互に此間の恨み

打忘て島国の為に御計のあすと

御是非ある御代の御主人の印しゑい

道に向て心実の御相談仕合やおまな

肝くらさ巧て親子諸共に引よ留置は

光ある御名や南山にあとて北山の

悪名流ゆる積り又いかな按司添の慈悲

【083左】

【083右】

の肝かたて色々情けたへめしやうち
てやり人の御臣下の誠絶果てこまに
肝寄る事や又なひさめいらぬ慈悲
尽ちあたなとるものもむかしから
今に数やしらぬ片時も急ち御暇よ
たはふれ

天底の子

一 やあ大主計略偽の世の中よやれは
たゝ真肝しちをてたまされてすまぬ

南山の様子みすく取究め兎角片

付やある筈よたひものおの内やまつ

留ておきやへらに

一 やあ天底の子人のことの葉や胸内の

割府いこと葉の上に肝の底までも

探りきる程の智高けなひぬあれはいきや

し島国の治め又なゆか亀千代か今の

御使の御趣意又千代松亀千代か今の

願立や誠真実の心から出て偽の巧み

絶てないぬあすや取よ究めとん取よ

【084
左】

【084
右】

定めとんされ按司かなしむかしから
今に治まとる御代や君臣下ともに
義理の道守て島国の治道直にあとて
御万人もおれ、の願事も遂て
義理の道筋も堅取守て御主人の
御為島国の為に命ち捨ゆすや露

ちらすことに思果すゆへといかな武士

国の太刀かたなてすものよておそれゆか

誠天道の御慎あとて島国の仕置

御念入めしやうち人のよしあしもさやか

照りわかちよたしやすや揚てわるさ

すや捨ていさめこと好てそさめこと

嫌て人の口開ち人の肝あけて義

理の御捌の道広てからや跡影もよ

隠す深山住人も走よ集まやひわか

御主の御為誠肝尽ち働かな置め

照り増る光出る日のことに四方の海山も

洩るかたなひらぬ恵み照渡て諸離や

諸島海に航渡山に橋かけてみつき

【085
左】

【085
右】

光あらはれて世々のよゝとらめ御名や
朽やらぬあゝなまの御詔事拝て
御万人や有難さ思て目眉打笑て

向て来る顔も目の前引寄て北山
の榮るしるしたやへる

【*088
・
*089 右】

按司
一 やあ大主南山に遣はしゆる返書調らす

謝名

一 おうやあ天底の子急ち調やひ上て
きやうれ又千代松龜千代列てくう

天底

一 おう 一 やあ仲宗根のひや与座
の大主急ち呼てきやうれ

仲宗根

一 拝留やへて

仲宗根

一 与座の大主列てきやへたん

按司

一 やあ大主つかいしめたすや別事やあ⁴⁵
ぬ

【*088
・
*089 左】

尋ねほしやあてと呼ちむちやる

与座
一 あゝのふ事か急ち仰すめしやうれ

按司

一 大主や南山になし子いくたひか

与座

一 男子ふたりたやへる

按司

一 兄子千代松弟子龜千代へ

与座

一 扱々いきやし按司かなし知りめしやうちいまひら

【*090
右】

按司
一 おの事とやゆる大主よ尋ひてふたり
押列て遙々とこまに渡てきちをん

呼寄てあれは頓てこんしゆもの

千代松龜千代

父

一 やあ父親よ 一 やあなし子

東江ふし

一 あけゆめかやゆら

与座

一 やあなし子赤子の時分別れやいをれは
哀れ面顔も夢現心行逢ててやり
知よめいやなあれは

一 やあ父親よ赤さての内に振別れて

をれはいきやかなていまひら音伝も
なひらぬ思ひ身に余て肝もきもならぬ

亀千代とふたり命ち思はまてしらぬ

此国にとまひく にきやすか誠拝ゆ

すや夢かやへひら

按司

一 やあ千代松やあ亀千代親の為ともて

波路遙々と渡てきある心感してと

をゆるやあ大主此間やおれく の片付

かぬあてと留置もあたるにやかた

つけて暇とらしゆもの親子押列て

誇て立戻れ踊てたちもとれ

父千代松亀千代

一 あゝたうと

【090左】

【091右】

千代松

一 願たこと叶て誇らしやとあやへひる
此御恩一期ちにかめやへら

按司

一 多ひ大主国元にかは按司に首尾方や

是々よたしやある様に計やひ語ふれ

与座

一 拝留やへて親子ふやはしやひ錦うち

重ね立帰るけふや誇らしやとあすか

あてなしのふたりいきやかしゆゝら

北山ノ子蘭丸虎千代

一 やあ父親よわ身も諸共に列て給ふれ

虎松

一 わめもつれいかにやあ父親よ

按司

一 やあく おか達やこまに生れたるものよ

南山にいきゆる道や又なひらぬたうく

けふからや明日からや我か側におちやひ

おの素立しちをとて樂よ誇らしゆん思

【091左】

【092右】

とまでをりよ

虎千代

一 やあ按司かなし哀れ此二人やこまに

生れとて素立をる事やめしやいることや

すか親や南山の御臣下よやゆる素立

てやり一期をいの又なゆめ是非よ知めしやうち

ゆるちたはふれ

虎松

一 やあ父親よ母親にたひんす捨られて

居とて又も父親の捨てまひんやれはやき

前とわ身やいきやかしやへら

千代松

一 やあ父親よすたし母親も待兼て

いまひん片時も急ち御暇よしやへら

亀千代

一 たうく御暇よしやへら

虎千代

一 虎松もともにつれて給ふれ

虎松

一 舎兄前とわ身すてまかひいまひか

【092左】

与座

一 あゝ哀れはかなさやふたつなひぬわ身の

片時⁴⁶やならぬ中にはさまれて我肝

くら闇になるか心気

さん山ふし

一 ふたつなひぬわ身の中にはさまれて

こゝろくら闇になるかしんき

按司

一 あゝ人の上とやすかかにもつれなさめ

互に鳴暮ちくつさしちをれは誠

留置る肝の忍はらぬ二人共にいとま

ゆるちやらしゆもの親子諸共に押列て

親子共

いまふれ 一 あゝたうと

与座

一 やあ按司かなし身に余る御恩打重く

誠かや実か嬉しさのあまり誠でもおまぬ

やあ按司かなし此御恩たうとさやいつし

忘れゆか国元には年々の始わか主人

【093右】

【093左】

按司の十百歳のおかほ願て又親子この
国に向て按司かなしおかけほさへ願よ
あけやへら

千代松龜千代

一 やあ按司かなし段々の御慈悲いちも尽
さらめ此御恩たうとさや胸に思深く
按司かなし天の百といつまでもおかけ
ほさへめしやいる御願しやへら

謝名

一 やあ大主此からの先や船の往来も
しけくあらたひもの文の通はしに互に
睦ましく取合よすらに

与座

一 いやれることさらめ是からの先や互に
むつましく取合よすらに

与座

一 やあ按司かなし北山に謝名南山に与座
ふたり此御代に生れやいをれば弓矢
とりをさめ軍事やめて国公安全

【094右】

【094左】

疑やあやへらぬ

按司

一 あゝ誠大主の智高あらわれて謝名と
大主や割府こゝろやあ天底の子明日や
大主の船送さんしゆもの急ちおれ

の用意しやうれ

天底

一 拝ん留やへて

与座

一 あゝ御情の御趣意美拜とをかみや
へる思きやけもすらぬ親子振合ひ
立帰るけふや嬉しさとあすか誠御暇
みよんにゆける涯や此間の名残袖に
貫留て立別れ兼る馴し御側
やあなし子日も暮てをれば歩まらぬ

あものけふや我が宿に押列てむきゆて
明日のあけく に打立んしゆものたう
たう御暇よしやへら

【095右】

【095左】

按司

一 たう 〱

立雲ふし

一 親子振合ひもとていくけふや

よろこひの中のならりさらめ

与座

一 やあなし子御暇もすまち残ること

なひらぬたう 〱 急か 〱

【096右】

石根ふし

一 大主や先から按司添やあとから

くり⁴⁷みなとおりて舟元に登て

片手しや首たちかたてしや酌とて

目のしやいや大主名護渡まで見送ら

肝しやいや大主御宿までおくら

【096左】
*097左まで白紙

【098右・左 裏表紙】

註

1 「炬手」「炬火花」という熟語は辞書類にはみられない。「炬」は「炬燵」のにあるようにの意である。「炬火」で松明の意であるので「手」と書き損じたか、もしくは「炬火花」で松明のようなものを表すか。

2 「や」の脱字。

3 「単」の誤りか。

4 「單」の誤りか。

5 「に」の誤りか。『語学材料第二』に「トマイ〱ニ」とある。

6 「束」の誤りか。『語学材料第二』に「約束」とある。

7 「や」の誤りか。『語学材料第二』に「我ンヤ」とある。

8 区切り点を打ち、その上から見せ消ちをしている。

9 「いかならぬ」の誤りか。『語学材料第二』に「イカナラン」とある。

10 「と」の脱字。『語学材料第二』に「感ジテド」とある。

11 「若」の誤りか。『語学材料第二』に「若按司」とある。

12 「やひら」の誤りか。『語学材料第二』に「拝留ヤヒラ」とある。

13 「あ」の誤写。

14 区切り点を打ち、その上から見せ消ちをしている。

- 15 「装」もしくは「裳」の字が脱落しているか。
- 16 「編笠」の誤りか。「編」の音を類推表記し、「雨」としたか。『沖繩語辞典』『沖繩古語大辞典』に「雨笠」の項目なし。
- 17 「ㄣ」の誤りか。『今帰仁御殿本組踊集』に「たゝよりか」とある。
- 18 区切り点を打ち、その上から見せ消ちをしている。
- 19 「寄」の脱字。『今帰仁御殿本組踊集』に「押寄て」とある。
- 20 「ら」誤入か。
- 21 「従」一文字で「従兄弟」と読ませている。『今帰仁御殿本組踊集』にも「久志の若按司や我か従やれば」とある。
- 22 区切り点を打ち、その上から見せ消ちをしている。
- 23 「あ」の脱字。
- 24 「功」の誤りか。『今帰仁御殿本組踊集』に「功德」とある。
- 25 「盛」の誤字。
- 26 「使」の誤りか。『今帰仁御殿本組踊集』に「御使」とある。
- 27 「使」の誤りか。『今帰仁御殿本組踊集』に「御使」とある。
- 28 『今帰仁御殿本組踊集』によると「分」か。
- 29 『今帰仁御殿本組踊集』によると「つか」か。
- 30 『今帰仁御殿本組踊集』によると「身や」か。
- 31 『今帰仁御殿本組踊集』によると「ろ」か。
- 32 「束」の誤りか。『今帰仁御殿本組踊集』に「約束」とある。

- 33 「使」の誤りか。『今帰仁御殿本組踊集』に「使」とある。
- 34 「束」の誤りか。『今帰仁御殿本組踊集』に「約束」とある。
- 35 「受」の誤りか。『今帰仁御殿本組踊集』に「待受」とある。
- 36 「い」か。『今帰仁御殿本組踊集』に「責いやひ」とある。
- 37 この「いやもの」は次の謝名の台詞の誤写か。
- 38 「獄門」などの誤りか。「旗門」で「獄門」と類似した語は辞典類に見当たらない。『今帰仁御殿本組踊集』に「かう門」とある。
- 39 「ふるさと」のことか。『今帰仁御殿本組踊集』に「故郷」とある。
- 40 『今帰仁御殿本組踊集』によると「息」か。
- 41 『今帰仁御殿本組踊集』によると「へれ」か。
- 42 『今帰仁御殿本組踊集』によると「の」か。
- 43 「と」脱字。
- 44 「諫め」の誤りか。『今帰仁御殿本組踊集』には「計ら」とある。
- 45 「ら」の脱字。
- 46 「付」の誤写か。『今帰仁御殿本組踊集』に「片付」とある。
- 47 『今帰仁御殿本組踊集』に「古字利」とある。